

私にとってのさまざまなカムイ (神々)

大雪山の魅力は、山だけでなく山の生活者である動物たちの存在が欠かせないでしょう。

木の実や花の実を食べ、巣を作り、子を育て、冬を越え、春の芽吹きを待つ。大雪山の恵みを存分に受けてシンプルなサイクルで生きる野生の彼らは、美しい大雪山に溶け込んでいます。崖を駆け上がることができるヒグマの爪も、深雪の上をしなやかに歩くキタキツネの軽い体も、岩稜帯に響くナキウサギの鳴き声も、厳しい大雪山で生き抜く強さを持っています。品格ある彼らの存在は憧れであり、そんな彼らを抱える大雪山はただの山としてではなく、懐の深い母なる山として敬うことができます。

時々想像することがあります。ほんの150年前に絶滅したエゾオオカミが今も大雪山に生きていたとしたら。足跡があったり、遠ぼえが聞こえてきたら…なんとロマンを感じるのでしょうか。出会えない今が残念でなりません。

今年6月、初めて野生のシマフクロウに接近すること



Nature Column (ネイチャーコラム)
自然ガイドなどで活躍する人々をリレーしています。

が出来た業務がありました。

ある森の中、研究者が指さした先を見上げると、木の枝に静かにシマフクロウは止まっていました。そのシルエットは、これまで見てきたどの鳥よりも大きく、『カムイチカブ (鳥の神様)』と呼んだアイヌの人々の言葉がダイレクトに響いてくるような浮き世離れた神々しいたずまい。とてつもない存在感を放っていました。

シマフクロウは、森林の伐採による営巣木の減少と河川工事による魚類の減少で、個体数が減ったとされ、絶滅危惧種に指定されています。現在、彼らのほとんどはバンディング (個体識別のため足輪を付けること) され、一部人工的に給餌場と巣箱を与えることで少しずつ生息数を増やしています。

オオカミのように、かつて、いた動物でなくなる前に住みやすい環境を整え、彼らが自活出来るまで人が手を添えて見守る。時間はかかるでしょうが、完全に野生になったシマフクロウが大きな翼を広げて空を飛んでいる…そんな日がくることを願っています。

環境省東川自然保護官事務所アクティブレンジャー 渡邊あゆみ



お箸大丈夫ですか？

国際交流員
シッシャノック・ホンティップラット

日本に来てから「お箸は大丈夫ですか？」と聞かれることが何回もありました。確かにタイでは食事の時何で食べるのかイメージが付かないですね。

タイでは基本的にスプーンとフォークでご飯を食べます。右手にスプーン、左手にフォークを持ち、スプーンですくって食べます。そして、スプーンで肉や野菜などを一口サイズの大きさに切ることもします。フォークは押さえる役割です。

麺類を食べる時はお箸を使います。ラーメンなどを食べる時は、お箸で麺を食べ、スープはスプーンで飲むのが基本です。日本のように茶碗を持ち上げて、直接スープを飲むことはしません。食器には絶対に口をつけてはいけません。そして、音を出してスープを飲むのも基本的に失礼です。そのほかタイの北と東北の地方では餅米を食べる文化があり、その時は手で食べるのが一般的です。数人でご飯を食べる時は、おかずを共有して食べま



す。取り分け用のスプーンが用意される店もありますが、一般的には家族や友達などの親しい者同士であれば、自分のスプーンを使って大丈夫です。おかずは一つずつ順番に出て来るわけではなくて、一度にすべてのおかずが並びます。タイでは大家族が多いので、おかずをシェアして食べることが多いです。

タイ人にとっては食べることがとても大事なことであり、どこに行っても食べ物がたくさんあります。また「ご飯を食べましたか」というあいさつもよく使われます。相手がまだ食べていなければ、誘ったり、料理を分けてあげたりするの也很常です。